華嵒の秋聲賦意圖

川上涇

華嵒の秋聲賦意圖は、故住友寛一氏愛蔵の大鵬圖とともに、わが国に現存する華嵒作品の雙璧とされ、展覧会に出陳され図録類に紹介されることもたび重なり、いまさら本誌の紙面を割くことは、あるひは非常識の譏をまぬかれないかもしれない。ところがこの真蹟疑ひない画幅の款署「乙亥冬十月新羅山人寫時年七十有四」のさし示すところ、すなわち華嵒の生年を康熙二十一年とすることが、かれ自編の詩集『離垢集』中の詩に記された干支より推算される生年と符合しないといふ事実に逢著したので、いささかその点を弁析し、併せて二三の事項について卑見をのべるために、この一文を草する。

図の右上角より左下りに長い自題がある。

離垢（朱文長方印）

歐陽子方夜讀書。聞有聲自西南來者。悚然而聽之曰。異哉。初淅瀝以瀟颯。忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚。風雨驟至。其觸於物也。鏦鏦錚錚。金鐵皆鳴。又如赴敵之兵。銜枚疾走。不聞號令。但聞人馬之行聲。予謂童子。此何聲也。汝出視之。童子曰。星月皎潔。明河在天。四無人聲。聲在樹間。予〔曰〕噫嘻悲哉。此秋聲也。胡爲〔而〕乎來哉。蓋夫秋之爲狀〔也〕。其色慘淡。煙霏雲斂。其容清明。天高日晶。其氣慄冽。砭人肌骨。其意蕭條。山川寂寥。故其爲聲也。凄凄切切。呼號〔憤〕奮發。豐艸綠縟而爭茂。佳木葱蘢而可悅。艸拂之〔而〕色變。木遭之而葉脫。其所以摧敗零落者。乃〔其〕一氣之餘烈。夫秋刑官也。於時爲陰。又兵象也。〔於〕而行爲金。是〔謂〕天地之義氣。常以肅殺而爲心。天之於物。春生秋實。故其樂〔在樂〕在也。商聲主西方之音。夷則爲七月之律。商傷也。物既老而悲傷。夷戮也。物過盛而當殺嗟〔乎〕夫。草木無情。有時飄零。人爲動物。惟物之靈。百憂感其心。萬事勞其形。有動〔於〕乎中。必搖其精。而況思其

力之所不及。憂其智之所不能。
宜其渥然丹者爲稿木。〔黝〕黝
然黑者爲星。星奈何〔以〕非金石之
質。欲與草木而爭榮。念誰
爲之戕賊。亦何恨乎秋聲。
童子莫對。垂頭而睡。但聞四
壁蟲聲唧唧。如助予之
歎息。　乙亥冬十月。新羅山人寫。
時年七十有四。華嵒（白文方印）秋岳（白文方印）

右は歐陽修の秋聲賦であり、末尾の款署は、この図が乾隆二十年乙亥（一七五五）華嵒七十四歳の作であることを示す。歐陽修（一〇〇七―一〇七二）、字は永叔、醉翁・六一居士と号し、学問文学の各方面に劃期的業績を遺した北宋の代表的文人。散文においては古文の唱導者として名高く、その古文は以後永く散文の典刑となり、詩においても宋の詩風の創始者であった。詩を単に感情表出の場とせず、それと同時に理知的表出の場とし、知性を誇る詩を作るのが宋の詩風であるが、この秋聲賦にもこの傾向があらはである。かれは宰相となり、死後文忠と諡された大官であるばかりでなく、たびたび科擧の試験官となって幾多の英才を門人としたため、その影響力はとくに大きい。蘇軾・蘇轍兄弟は嘉祐二年知貢擧のときの進士合格者であり、蘇軾は元祐六年に弟の轍、歐陽修の三子とともにその文集を編纂し、序文を書いてゐる。

秋聲賦は嘉祐四年歐陽修五十三歳の作、居士集巻十五に収められてゐる。前掲釈文中の〔　〕は嘉慶二十四年重刊の歐陽文忠公全集の文字。賦は秋夜しづかに読書してゐるとき、風の響や木の葉の散る音を聞き、秋についての哲学的想念を詠じたもので、図は「予謂童子。此何聲也。汝出視之。童子曰。星月皎潔。明河在天。四無人聲。聲在樹間。」といふ賦の場面を画く。主人公の顔と胸、灯の炎、主人公に向けた童子の顔と屋外を指す掌、建物と樹幹、勾勒の葉、崖の下辺などに代赭が用ゐられ、淡墨と代赭の点描で落葉をあらはし、左方の樹葉、中央の木立の根元、右の崖には淡く藍を混ぜ、これらさりげない淡彩の効果が、拡散的な構図と相俟って、風の吹き渡る秋の夜の涼気と粛散の趣とをさわやかに写してゐる。しきりと葉を散らす木々のさまざまな姿は、呉派の山水画のうちに完成された樹法の型を軽快な筆に置きかへたものであり、このあたりにも、硬化した当時の南宗画に対する華嵒の姿勢が窺はれる。

左下角の「山水文章」の朱文印は誰のものかわからない。またこの図は著録の類にも見えない。いまは参考までに葉德輝の消夏百一詩（光緒三十年自序）の華嵒を詠じた七絶をかかげておく。

粉碎虛空畫筆精。昔藏巨幅寫秋聲。於今尺幅成千里。目送征鴻萬古情。

華嵒の伝記資料としては、張庚（浦山、瓜田、白苧村桑者）の國朝畫徵續錄、呉顥約・呉振棫の國朝杭郡詩輯（巻二十）、馮金伯の國朝畫識（巻十一）、蔣寶齡の墨林今話、秦祖永の桐陰論畫下、消夏百一詩下、竇鎮の國朝書畫家筆錄（巻二）、李濬之の清畫家詩史丙上、錢塘縣志、杭州府志等が知られてゐるが、それらのうち、のちの多くの書物の記載のもととなった國朝畫徵續錄と画友門人に及んだ墨林今話（咸豐二年程庭鷺跋）とをかかげる。

國朝畫徵續錄下

華嵒。字秋岳。號新羅山人。閩人。僑居杭州。善人物。山水。花鳥。草蟲。皆脫去時習。而力追古法。不求妍媚。誠爲近日空谷之音。其寫動物尤

佳。山水未免過於求脫。反有失處。能詩亦古質。客維揚最久。晚年歸西湖。卒於家。年望八矣。

墨林今話卷二

新羅人華嵒。字秋岳。臨汀布衣。自少遊學。慕西湖之勝。遂家錢唐。畫山水人物花鳥草蟲。皆能脫去時蹊。力追古法。不求妍媚。別具風神。書法鍾王。又善吟咏。草衣芒履。翛然超俗。客維揚最久。歸浙後卒。年近八十。所著詩有離垢集。評者謂。如春空紫氣。層厓積雪。玉瑟彈秋。太阿出水。足稱神品。書畫之妙。亦似其詩。海內推爲三絕。繼迹南田。殆無愧焉。惟山水過於求脫。瓜田畫徵錄。論頗非之。然其率略之處。正復難及。聞溪計儋石藏小景一册。絕佳。其中自題諸絕句。皆清峭可喜。如竹溪書屋云。紅板橋頭煙雨收。小窗深閉竹西樓。棗塘水繞鴛鴦夢。落盡閒花過一秋。五絕云。既喜明月來。復惜明月去。吾獨避煩囂。坐爾竹深處。獨坐春山空。山香吟思發。試將太古琴。靜夜彈松月。

秋岳晚年歸老西湖。主於玉玲瓏館汪氏。汪與秋岳姻婭也。有女弟子汪漣字文水。深得其法。適仁和己卯孝廉錢機號耐閑。官建德縣教諭。辭職而歸。一吟一畫。極偕隱之樂。嘗見其所畫劍南詩意册。幽秀之致。亦妙在能不能間。晚號文道人。生兩女。皆善畫。

鄭岱字在東。號澹泉。又號瑞石山人。與秋岳友善。秋岳以逸勝。澹泉以能勝。寫士女花卉。筆極蒼勁。其自題山水云。數枝老樹半無葉。一個茆亭終日空。惟有鷺鷥常到此。飛來飛去送殘紅。猶子方同。名紫城。克承家學。精整中饒有秀逸氣。惜中年下世。未造老境。墨香畫識。以岱字紫城。且稱爲秋岳弟子。皆悞。

さらに離垢集に附刻された雍正九年（一七三一）の徐逢吉の題辭と道光十五年（一八三五）の華嵒の再姪孫華時中の記新羅山人離垢集巻後とは、伝記資料として捨てがたいので、つぎにかかげる。

華君秋岳。天才驚挺。落筆吐辭。自其少時便無塵埃之氣。壯年苦讀書。句多奇拔。近益好學。長歌短吟。無不入妙。蓋具有仙骨。世人不知其故也。憶康熙癸未歲。華君由閩來浙。余卽與之友。迄今三十載。深知其造詣。嘗謂。本根鈍者。失之弇鄙。天資勝者。多半浮華。求其文質相兼。而又能超脫於畦畛之外。如斯人者。亦罕覯矣。其詩如晴空紫氣。層崖積雪。玉瑟彈秋。太阿出水。足稱神品。且復工書畫。書畫之妙。亦如其詩。昔毘陵惲南田。擅三絕名於海內。斯人彷彿當無愆焉。時在雍正九年辛亥歲重九日。紫山老人徐逢吉題。

離垢集五卷。高叔祖秋岳公遺稿也。公諱嵒。原字德嵩。生於閩。家於浙。不忘桑梓之鄉。因自號爲新羅山人。新羅者。閩南汀州之舊號也。公性岐嶷。好詩畫。方就傅卽矢口成聲。落筆生趣。壯遊吳越。居維揚最久。善與人交技益進。聯鑣北上。譽噪一時。其作畫不拘一體。山水人物。時出新奇。畫必有題詞。甚蒼老而無俗氣。書法整整斜斜。皆有別致。白苧村桑者張浦山稱。其力追古法。脫去時習。洵爲近日空谷之音。其言殆不誣也。晚歸西湖。不甚酬應。惟以擧子業課後昆。子浚。孫繩武。擧於鄉。孫淸武。餼於庠。自是手澤僅存。尺幅珍如和璧矣。時所見無多。而祖祠壁間墨蹟。歷今百年不壞。尤疑其有神護。其詩於阮雲臺先生輶軒集（阮元輯、兩浙輶軒錄）中。採登數首。嘗讀一過。而惜未睹其全。迨自道光丁亥歲承乏仙源。其曾孫世琮世璟來遊。以公手錄全稿出示。吟玩再三。寫作信不猶人。乃益嘆其有美不彰也。因命兒曹繕抄。以質大雅。僉曰是眞神品也。不可不傳。爰於簿書之暇。親加校閱。以授梓人。囑其曾孫世琮世璟。考辨魯魚。凡越三月書始成。承諸君子錫以辨言。予以題辭。是集當可不朽也。因誌數言於後。時乙未仲夏下旬之四日也。再姪孫時中謹記。

華嵒の籍貫について、呉修の昭代名人尺牘小傳（道光六年自序）、國朝書畫家筆錄、歷代名人生卒年表、歷代人物年里碑傳綜表、東洋歷史大辭典等は福

建閩縣としてゐる。これは國朝畫徵續錄などに「閩人」とある閩を福建省の異称と解せず、閩縣としたことより生じた誤りであって、すでに杉村勇造氏も摘記された如く（世界名畫全集二〔昭和三十三年河出書房刊〕秋聲賦意圖解說）、前掲の華時中の記に「閩に生れ浙に家す。桑梓の鄉を忘れず、因りてみづから號して新羅山人となす。新羅は閩南の汀州の舊號なり。」とある通り、華嵒の籍貫は多くの書の伝へる福建臨汀（いまの長汀縣）とするのが正しい。「少きより遊學し、西湖の勝を慕ひ、遂に錢塘に家す。」（國朝杭郡詩輯、墨林今話等）「杭州に僑居す。」（國朝畫徵續錄、桐陰論畫、國朝書畫家筆錄等）といはれるが、華嵒が浙江錢塘（杭州）に移った年次については、前引の徐逢吉の題辭に「憶ふに康熙癸未の歲（四十二年〔一七〇三〕）華君閩より浙に來る。」とあり、若年早くも本貫の地を去ったことが知られる。從ってその地に事蹟を殘すこともなかったと思はれ、長汀縣志にも記事を見ない。

國朝畫徵續錄以下の諸書が、「維揚（江蘇揚州）に客たること最も久し。」「維揚に居ること最も久し。」と記し、華嵒は揚州に緣故の深い画家であると考へられ、時あだかもかれとほぼ同年輩の揚州八怪の活躍期にあたり、華嵒を八怪に準ずる見解も世に行はれてをり、明清畫家印鑑の如きは「揚州八怪之一」としてゐる。離垢集の詩題によれば、壬子（雍正十年〔一七三二〕）の冬揚州から錢塘に帰ったこと、庚申（乾隆五年〔一七四〇〕）に揚州にゐたこと、辛酉（乾隆六年）揚州より錢塘に帰ったこと、壬戌（乾隆七年）また揚州にゐたこと、癸亥（乾隆八年）に揚州にゐたことが確実であること、乙丑（乾隆十年）に揚州にゐたこと、辛未（乾隆十六年）冬揚州にゐたこと、翌壬申二月に錢塘に帰ったことがわかる。

李斗の揚州畫舫錄（乾隆六十年自序）は、著者三十年の揚州在住の見聞にもとづき、文人墨客の伝記逸事を錄することも多く、およそ百三十人の画家の略伝をかかげる。その中には流寓の画人も少くないが、つひに華嵒のために伝を立てるに至ってゐない。直接かれに関する記事は塩商徐氏の家に蔵する周太僕銅鬲の絵図を作ったことのみである（巻一）。ほかに華嵒の名の出て来る記事は、程兆熊が「畫筆與華嵒齊」（巻十二）、張四教が「學新羅山人」（巻十五）といふ二件にすぎない。また嘉慶十五年（一八一〇）重修の揚州府志も華嵒に及ばない。揚州の人で華嵒と親しかったのは員果堂、員周南らであり、揚州滞留中は員家の客となったことは、離垢集より察せられるが、これらの人々の本名もまた事蹟も、未だ知り得ない。

このやうに見て来ると、華嵒と揚州との繋りは、余り濃いものではなかったという風に考へた方がよささうに思はれる。あるひはその芸術から想像される淡雅な人がらが、八怪の人々とは自ら風趣を異にし、強烈な印象をこの土地に遺さなかったのかもしれない。

揚州八怪諸人との交友関係にしても、具体的な証跡としてはいまのところ、離垢集巻三の「贈金壽門時客廣陵將歸故里」「題環河飲馬圖贈金冬心」の二首（乾隆七年作）と、金農（字は壽門、號は冬心。錢塘の人）の冬心齋研銘（雍正十一年自序）中の一首および冬心先生畫竹題記（乾隆十五年自序）の一節を見出すのみである。いま第一を除いてつぎに掲げる。最後のものは華嵒とその弟子許濱とのことを記したもので、両人合筆の桃柳雙鴨圖が蘇州博物館藏畫集に載ってをり、それには「花甲重周。庚午（乾隆十五年）初春。華秋岳。許江門。同寫於解弢館」の題がある。

題環河飲馬圖。贈金冬心

野磧敷柔莽。霜樗敵勁颸。環河遲碧瀠。舍策領纖離。

新羅山人畫竹研銘

此研畫竹。翠袖江頭。年年秋雨。作湘女愁。

冬心先生畫竹題記

丹陽許濱江門。善畫窠石水仙。薄冰殘雪時見嫣然。趙子固九十三莖畫法。江門深得之。汀州華嵒秋岳。僑居吾鄉。相對皆白首矣。嘗畫蘭草紙卷。卷有長五丈者。一炊飯頃便了能事。清而不媚。恍聞幽香散空谷中。二老每遇古林茶話。各出所製誇示。予恨不能踵其後塵也。今年六月予忽爾畫竹。竹亦不惡。頗爲二老歎賞。于翠公閒云。宋李息齋無此。題記數行也。近日習家池頭風荷露。蓋世上人。可不必畫。必欲潑墨塗染。只好懸諸葱肆。供拾苓通者。作息肩之觀也。

ただ秋聲賦意圖に即して考へると、金農にも同題の制作のあったことが想起される。邵松年の古緣萃錄（光緒二十九年自序）卷十三に著錄される金冬心寫名賢詩文畫冊、これは十二開水墨紙本、高四寸八分、闊六寸五分、横長の小冊であって、その第五開に乾隆元年（一七三六）の年記がある。その一図はつぎのやうなものであったといふ。

第八開。寫歐陽公秋聲賦意。茅屋一椽。雙梧挺立。菊花滿徑。明月在天。一人據案。秉燭讀書。賦長短十五行。農字小印。

ひとしく歐陽修の秋聲賦意圖を画いたこと、画面の大小や構図の繁簡はあるにしても、画幅の主要部に多く類似の認められるこの両人両図の間に、全く関聯なしと言ひ切ってしまふわけにもゆくまい。また八怪と華嵒の関係を物語る資料の捜訪も、やうやく緒に就いたにすぎないので、これを別としても、今後何が出て来るかわからない。しかしわたくしの現在の心境として、華嵒の画家としての性格を、揚州八怪の諸人のそれと同一視し、あるひは親近性の濃いものと考へることには賛成し難い。管見によれば、年次の明らかな華嵒作品のうち、最も早いものは「丁亥（康熙四十六年〔一七〇七〕）長夏秋岳華嵒」の款ある噉荔圖（遼寧省博物館藏畫集下）であって、これは華嵒二十代なかばの制作といふことになり、この点中年以後画筆を執った八怪の人々とかなり趣を異にする。さらに八怪には限られた主題を追求した者が多いのに対し、華嵒の作画範囲は人物・山水・花鳥・草蟲の各部門に及び、年とともに「よく時蹊を脱去し」たかれの画家としての個性は、はっきりした姿をあらはし、華嵒独自の画風が形成されてゆくが、既成本格の画枝を多方面に亙って習練体得したことは、伝世の遺作のうへに十分窺はれる。そして個性の強烈な発揮を表現の根本とする八怪の画風を顧るとき、華嵒をかれらの同類と見ることはできないやうに思はれる。

華嵒の生年について、澄懐堂書畫目錄、明清畫家印鑑、中國歷代書畫篆刻家字號索引、宋元明清書畫家年表、華嵒雜畫冊（徐邦達、一九六一年、朝花美術出版社刊）、歷代流傳書畫作品編年表、蘇州博物館藏畫集等の諸書は康熙二十一年（一六八二）とし、疑年錄彙編、歷代名人生卒年表、中國美術年表、宋元明清書畫名賢詳傳、東洋歷史大辭典、歷代人物年里碑傳綜表等は康熙二十三年とする。享年については、國朝畫徵續錄に「卒於家。年望八矣」、墨林今話に「歸浙後卒。年近八十」とあり、賀天健は新羅山人畫集（一九六二年、上海人民美術出版社刊）の「華秋岳繪畫風格、理法的評述」のなかで「壽至七十八歲」とし、また明清畫家印鑑は「乾隆乙亥（二十年〔一七五五〕）。年七十四。尚在」、中國歷代書畫篆刻家字號索引も同様、歷代名人生卒年表は

「歳數七十餘」、宋元明清書畫家年表は乾隆二十七年の欄に「華嵒時年八十一」と記す。没年を明記したものは、さきの華嵒雜畫冊で徐邦達が乾隆二十一年（享年七十五）とし、蘇州博物館藏畫集も同様、東洋歴史大辭典は乾隆二十九年、一九六〇年にスイスで開かれた中国絵画展の目録は乾隆三十年（一七六五）とし、世界美術大辭典は乾隆二十七年頃とする。以上のうちのいくつかについては、以下述べるところから、そのやうに定めた理由を推察することができよう。

墓誌銘・行状・年譜の如き確実な文献史料が伝存しないかぎり、画家の生卒年次を推算するためには、まづ作品の款署の年記を根拠とするほかはない。近年中国で出版された二書、宋元明清書畫家年表と歴代流傳書畫作品編年表とは、このやうな作業に一応役立つ。前者は康熙六十年（一七二一）の山鼠啄栗圖以下乾隆二十六年（一七六一）の栗鼠小禽圖までの十七点を、後者は康熙五十四年の山水花卉冊から乾隆二十一年の雪柳山禽圖に至る六十二点を記載する。また図録類で管見の及んだもののうち年記のある作品は、康熙四十六年より乾隆二十六年の間に約五十点を数へる。これら三者の間に重複出入のあることは言を俟たない。もとより図録掲載の作品や著録の書に見えるものが、すべて真蹟とは定め難く、ことに最近、既知の卒年以後の画作の例にも接してゐるので、華嵒についても、右の諸作をすべて同等の資格で資料とすることの危険はよくわかってゐる。そしてのちに見る通り、それらの間に年代的矛盾もある。しかしいまは摹偽の作といへども、多くはなんらかの拠りどころあるものと考へておく。なほすでにふれたやうに、離垢集には干支を記した詩題が間々見られ、これを作品の年記と照合して以下考察を進めるわけであるが、乙亥（乾隆二十年一七五五）を最後とし、それ以後のものはない。

本題の秋聲賦意圖のほか、華嵒の生年を推算する資料としていま挙げ得る作品は、つぎの四点である。

(一)聚鶴圖　甲戌冬十一月……時年七十有一　新羅山人畫集

(二)山高水長圖　乙亥冬十月……時年七十有四　新羅山人畫集

(三)淵明歸趣圖　乙亥冬日……時年七十有四　別下齋書畫錄卷三

(四)太眞揮扇圖　丙子春……時年七十有五　澄懐堂書畫目錄卷七

甲戌は乾隆十九年、乙亥は二十年、丙子は二十一年であって、(一)によれば華嵒の生年は康熙二十三年、(二)以下によれば同二十一年となる。

離垢集巻三に次の七言律詩がある。

癸亥十月七日。過故友員九果堂墓。感生平交。悲以成詩

一坏黄壤依林莽。六十衰翁禮故人（是日余六十賤辰）。揮涕感今哭已痛。臨風念昔意何申。松門積綠陰恒閟。石碣題朱色未陳（果堂塋於九月七日）。肆目離離霜草外。夕陽如悼冷山春。

この詩によって、華嵒の誕生日が十月七日であることがわかり、癸亥は乾隆八年（一七四三）、詩句の「六十」を数へ年とすれば、華嵒は康熙二十三年（一六八四）に、満年齢とすれば康熙二十二年に生れたことになる。ところが第五巻につぎの五言律詩を見出す。

辛未余年七十。仍客廣陵員氏之淵雅堂。艾林以芹酒爲壽。因賦是詩

素侶同蘭蕙。道心日已微。顏和雙頰展。鬢淡一絲飛。旨酒生香嫩。鮮芹碧玉肥。矧余雖不愔。如子主情希。

辛未は乾隆十六年、この年に数へ年七十とすれば、かれの生年は康熙二十一年となる。さらにこの巻には、「乙亥児子云云」の詩より二詩を隔ててつぎの詩がある。おそらく乙亥、すなはち乾隆二十年の作であらう。

雪窗烘凍作畫

新羅小老七十五。僵坐雪窗烘凍筆。畫成山鳥不知名。色聲忽然空裏出。

右の七十五を数へ年とすれば、新羅山人の生年は康熙二十年となる。

以上作品と自編詩集の語るところから推算される華嵒の生年は、康熙二十年より同二十三年に亙り、われわれはこの四年のうちからある一年を選ばなければならない。われわれの立場として第一に重きをおくべきは、作品の題款である。本題の秋聲賦意圖の自題は、枯れた老筆であって、一見率略な書風のようであるが、よく看ると結体正しく、字劃に省略のあとがほとんど認められず、筆力の籠ったものである。画家の真筆として疑ひない。すなわち華嵒は乾隆二十年乙亥冬十月に「時に年七十有四」と書いたのである。これをそのまま承認すれば、さきにあげた(二)—(四)の作品の年記とも矛盾なく、「辛未余年七十云云」の詩題とも一致して、華嵒の生年は従来の一説たる康熙二十一年となる。すると離垢集巻三の乾隆八年癸亥の詩に六十といふのはどうなるか。すでに疑年錄彙編も、離垢集のこれら二詩の矛盾を指摘し、結局癸亥に六十を数へ年と解し、康熙二十三年生れと定めた。両詩の文献的価値を比較すれば、癸亥の詩に重きを置くべきであらう。「是日余六十賤辰」と注記したこの詩を疑ふことは頗る困難である。この際年齢を実際より少くいふ筈はなからう。いまこれを信ずれば、六十を満年齢すなわち還暦と考へて、華嵒の生れたのは康熙二十二年十月七日となる。さうすれば乾隆十六年辛未には数え年六十九、同十九年甲戌には七十二、同二十年乙亥には七十三、同二十一年丙子には七十四歳となる。

以上の矛盾錯雑を解決する方策として、わたくしはつぎの一試案を提示して江湖の垂教を仰ぎたい。癸亥員果堂の墓を過って作った七言律詩のいふところを信じて、華嵒は康熙二十二年十月七日に生れたとする。秋聲賦意圖の「年七十有四」は、冬十月、年末に近づいたとき老人にまあるごとく、来年の年齢を書いたのであらう。山高水長圖と淵明歸趣圖も同断。辛未余年七十の五言律詩も、詩の配列から見て夏以後の作と思はれ、老年再び揚州に遊ぶことができるかどうか心もとないので、一年早く年寿を祝ったと解すべきであらう。

「新羅小老七十五云云」の詩も、年齢いよいよ高く、年齢を多くいふ傾向がますます強くなったと考へるほかはない。太眞揮扇圖の年記も、同じく完数を記したと見る。聚鶴図の「時年七十有一」は、図版では款署の最後の字が一としか讀めない。いろいろな考へ方があるが、原蹟に接して検討できるまで棚上げにしておく。華嵒の生年を康熙二十二年とすれば、作品の年記の最後の年、乾隆二十六年には数へ年七十九歳となり、國朝畫徵續錄の「年望八矣」、墨林今話の「年近八十」とも照応する。ただ國朝畫徵續錄の選述年代がいまのところ不明であり、余紹宋の書畫書錄解題の年分表は、撰者張庚の卒年を乾隆二十五年としてゐる。本書が張庚自身の手に成ったままとすれば、華嵒没年の下限は乾隆二十五年となり、乾隆二十六年の作が偽托であることは論を俟たない。

離垢集五巻は、本稿のはじめに掲げた華時中の記にあるやうに、かれの「高叔祖秋岳公遺稿」であり、その「手錄全稿」である。道光十五年一八三五の顧師竹の序にも「舊稿五卷。山人手自繕寫。書法高古。直逼晉唐。」とあり、これら記序の記述を讀めば、華嵒の詩集はその死後七十余年間

刊行を見なかったが、道光十五年その子孫が自筆稿本を附印したことがわかる。新羅山人題畫詩集と稱する石印本（内題は新羅山人集、板心は新羅山人詩集）があるが、巻首の厲鶚以下題詩の諸人に出入があり、華時中の記はなく、本文第四巻の末尾二十九首と第五巻の巻末に至る四十首を欠く。

すでに先人もさう解した如く、詩は年代順に配列されてゐる。乾隆十三年戊辰の作である筈の「題秋山放遊圖」（巻四）の序に「丁卯冬云云」とあるのは、前年のことを追懐した作と考へればよからう。離垢集を讀めば、華嵒の絵画制作と内面生活とを窺ふことができるし、集中の諸詩と伝存著録の画蹟とを照合すれば、作品討究のうへに資するところも多いが、いまはその一端を示すにとどめる。たとへば第二巻につぎの詩がある。

題鵬擧圖

朝吸南山雲。暮浴北海水。展翅鼓長風。一擧九萬里。

これはさきに触れた杉村氏の解説にも詩題と挿図が示されてゐるが、故住友寛一氏愛蔵の大鵬圖の題詩である。この詩は庚戌の詩と戊午の詩の間に置かれ、雍正八年（一七三〇）より乾隆三年（一七三八）の間の作といふことになる。後年旧詩により作画したと考へるよりは、画作と詩作とを同時と考へる方が芸術的に自然であらうから、大鵬圖は華嵒五十歳前後の作品と推定される。『明清の絵画』（東京国立博物館監修、昭和三十九年便利堂刊）のこの図の解説で、わたくしは七十歳に近いころの作品としたが、この機会に訂正しておく。

阿部コレクションには、秋聲賦意圖とともに、華嵒の人物山水冊（爽籟館欣賞二、國華六〇四、平凡社新版世界美術全集二〇）があるが、その題詩は離垢集巻一に散見する。すなはち第一開は寫古樹竹石、この詩はつぎに掲げるが、詩句と作詩の動機とを、この画冊の没骨山水図と見較べれば、不審の念を懐かぬ人はなからう。第二開は題畫屏八絶句の第三首、第三開は題秋泛圖、第四開は美人、第五開は松磵、第六開は夢中得句、第七開は遊山、第八開は高隱圖、第九開は樹底、第十開は蘆花、第十一、十二開それぞれ二句は、いまだ検索し得ない。かかる次第であるから、この画冊は再検討を要すること明らかであろう。

先人の画作に関するものには、董其昌の画巻の跋（巻二）もあるが、ここではいまふれた寫古樹竹石、倪瓚・王蒙合作の画蹟を追摹したときの詩をあげる。雍正七年の作。

寫古樹竹石

倪王合作一幀。昔在郎中丞幕府得觀。其雲石蒼潤。竹樹秀野。精妙入微。由來[二]十年。不能去懷。時夏間居。北窗新雨送凉。几硯生妍。追摹前賢標致。殊覺趣味沖淡。心骨蕭爽也。

寫罷茶經踏壁眠。古爐香嫋一絲煙。目遊瘦石枯槎上。心寄寒秋老翠邊。

乾隆十六年、恐らく最後となったと思はれる揚州滞留中の作と、乾隆二十年作の一首をあげて、華嵒晩年の姿を偲ぶよすがとしよう。

辛未冬。客邸大病月餘。默禱佛王。漸得小瘳。因遙思二子。感而成詩

我命輕如葉。飄飄浪裏浮。四盼蔑援綆。一念默中求。佛王垂慈惠。現以金光樓。望樓思二子。涙下不能収。

冬日讀書

北風酸辣吹老屋。閉戸不出縮兩足。焚香晝坐有餘間。信手抽書向日讀。但苦精神不如少。細字糢糊讀難熟。即能熟時也不記。何況多讀又傷目。年來漸老體漸衰。唯思美酒與爛肉。若得頓頓不喉嚨。且醉且飽享好福。